



武蔵野

埼玉大学図書館

2011年 4月27日 8号



図書館の1年

東日本大震災からの復興を願う 「原発事故」が突きつけたもの

はじめに 東日本大地震・大津波で亡くなられた方に心より哀悼の意を表します。被災された方には、お見舞いを申し上げます。被災された方々の当面の生活を安定させ、一日も早く日常の生活を取り戻せるよう、私たちにできるお手伝いをさせていただきたいと思っております。被災地域の大学が、新年度の開始を5月に延期するなどの特別措置をとる中、埼玉大学図書館では、被災した学生に本館を利用していただくことで、勉学・研究の支援をしたいと思っております。

本号は、日本青年館・佛木完氏、理工学研究科・小松登志子先生、脳科学融合センター・中井淳一先生に御寄稿していただきました。巻末には、年度の締めくくりとして、図書館の1年間の活動を振り返り、ご報告申し上げます。

東日本大震災 3月11日午後2時46分、自転車で乗っていた私は、重心が急に不安定になり、前に進めなくなりました。何とも言えない違和感を覚えました。目の前の電線が、激しく揺れ、ぶつかり合っただけでビシッビシッと音を立てていました。まるで縄跳びの「大波小波」のように大きく波打っていました。建物からは人々が飛び出し、不安そうにあたりを見回し、空を見上げていました。これはただごとではない。しかし、とっさに地震だとはわかりませんでした。ビルは軋み、ギシギシいってました。崩落の危険を感じ、自転車で乗ったまま歩道から車道に降りました。車はみな止まっていた。足下に地面の大きな揺れを感じ、

大地震だと気がつきました。

急いで大学に戻り、図書館に向かいました。館の入り口の階段下に職員が避難していました。利用者は、館員の誘導で全員外に避難していました。まだ館内に職員がいるのではないかと思います、1階事務室に入ってみました。数人の館員が仕事をしていたので、すぐに避難してもらいました。長い大きな揺れを、だれもが不気味に感じたに違いありません。巨大な津波が、今までに例をみないほど甚大な被害をもたらすとは、さらに原子力発電所（以下原発）事故が破滅的な追い打ちをかけるのは、だれが想像できたでしょうか。館内でテレビの電源を入れると、白波を立てて何波にもわたって次々に押し寄せる津波を中継していました。津波の先端が砂浜を滑り、田畑一面を飲み込んでいきました。海水が宅地に入り住宅を押し流す光景を見ても、この時点では津波のすさまじい破壊力を実感することはできませんでした。

図書館の被害 館内に戻り、閲覧室や書庫の被害を一通り見て回りました。最も被害が大きかったのは、3階の閲覧室でした。壁に固定した書架は、ボルトがすべて抜け、幅約7、8メートルにわたって床面に完全に倒れてしまいました（写真1）。幸い下敷きになったり、けがをしたりした人はいませんでした。天井の梁には通気口があります。空調用の通気口で、開口部には直径40cm位の大きくて頑丈な円筒形の金属製品が取り付けられています。これらが3、4箇所を外

れて落下していました（写真2）。頭上に落



写真1 倒れた書架



写真2 落下した換気口

ちたらけがをするほどの重さがあるもので
す。2階3階では、閲覧室にあるほとんどの
書架から本が飛び出し（写真3、写真4）、
床一面に散乱していました。



写真3 散乱した本

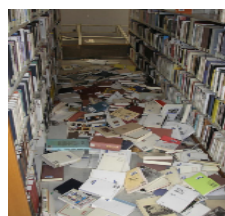


写真4 飛び出した本

被害が最も少なかったのは、書庫でした。
書庫には蔵書が多く、重量に耐えられるよ
う書架毎に「斜交い（はすかい）」がして
あり、頑丈に組み立てられていたからで
しょうか。いずれにしても、大地震の際には
書籍が落下し、書架が倒れる危険が大き
いことわかりました。地震発生時には利用
者に書架から速やかに離れるよう周知徹
底することが、重要な教訓の一つです。次
の日から3日間臨時休館し、職員一同書
籍の整理と館内の総点検を行いました。

天災と人災 東日本大震災は、計り知れ
ぬ被害をもたらしました。地震による東
日本太平洋岸の被災地の被害の全容は未
だに信じられないほどです。それに追い
打ちをかけ、被災地への支援・復興を難
しくしているのが、福島「原発」の事
故による放射線被害です。今も進行中
の「原発」事故は、天災と人災について
改めて深刻に考えさせる問題です。天
災と人災、そしてそれらの災害をわれ
らの生活、社会と文化に関わらせて、
考えてみたいと思います。大地震と想
象を絶する大津波の威力は、人知を越
えた自然の力です。科学の力を絶対的
なものとして誇り、振りかざすわれら
は、「自然を支配し万物に君臨した」か
のように振る舞ってきました。地球上に
住まいを借り、

自然との調和があって初めて、われら
の生きる基盤が与えられることをすっ
かり忘れてしまったのでしょうか。日
本有数の豪雪地帯である僻地に育つた
私は、大自然の圧倒的な力を幾度と
なく経験してきました。人々を和ませ、
豊かな恵みを与えてくれる自然は、何
の前触れもなく一変して人を拒絶し、
牙をむくことがあるのです。自然は
人間の力を凌駕し、究極的にはこの世
のすべてを包摂します。このことを経
験的直感的にずっと感じ続けてきま
した。

「三八豪雪」。1962年12月～1963年2
月、日本海側に記録的な大雪が降りま
した。小学3年生だった私は、一級僻
地で毎日必死で家の「雪掘り」を手伝
っていました。家は雪にすっぽり埋ま
り、屋根さえ見えません。平地のない
山間地の集落には雪を「除ける」場
所がなく、家の周囲に積み上げるしか
ないのです。絶え間なく降り積もる
雪は、手を休めれば容赦なく家を推
しつぶします。降りしきる雪はすべ
ての音を吸収し、不気味な静けさが
村全体を襲います。子ども心にも
「白魔」を感じました。

1964年6月16日1時2分、新潟地震
が起きました。小学5年生の時でした。
小さな木造校舎にいましたが、みな
一斉に外に飛び出しました。グラ
ンドでやった午後の体育の授業では、
余震が続く座っている地面が大きく
揺れていました。どこからともなく
地鳴りが聞こえてきたのを覚えてい
ます。

1967年4月26日朝、新潟県の水
沢新田集落の裏山が、幅250m、斜
面長150mにわたり崩壊しました。8
4万 m^3 の膨大な土塊が泥流とな
って全長950m（平均幅80m）に
わたって流れ出し、集落をのみ込み
ました。人家10戸が埋没倒壊し、死
者7名、行方不明1名をだす大惨事
になりました（新潟県、2007）。全
国紙一面で報道されました。峠を
一つ越えた隣の集落でしたので、残
雪のある山を越え現場に行ってみま
した。山が一つ大きくめぐり取られ
た光景は、目に焼きつき、上空を旋
回する取材ヘリの轟音が耳に残って
います。中学3年生の時のできごと
でした。

2004年10月23日、午前6時56分
ごろ、新潟県中越地方を中心に東北、
北陸、関東などにかけての広い範
囲で強い地震が発生。北魚沼郡川口
町で震度7、小千谷市で震度6強を
観測しました。…気象庁によると、
一回目の震源の深さは13Kmで、マ
グニチュー

ド (M) は8.6と推定されました (新潟日報社, 2004)。魚沼市に住む母と兄一家は屋外避難し、その後避難所生活を送りました。

私のこれまでの人生の中でもこれだけの大きな自然災害が起きています。自然が猛威を振るとき、私たちには全くなすすべがありません。

無人の春 日本が地震列島であることは世界中が認めるところです。地震の巢の上に、不測の事態が起きたら人間の力では統制できない原子力発電所を建設することの無謀さは、繰り返し指摘されてきました。放射線が、人体を破壊するのみならず、生物全体にきわめて有害で、破滅的な影響を及ぼすことも、科学が明らかにしてきました。原子爆弾によって地獄の惨状と放射線の恐ろしさを知ったのが、被爆国日本でした。水爆実験もそうです。第5福竜丸をはじめとし南太平洋で南洋漁業に従事していた多くの漁師が「死の灰」を浴びました。

「原発」は核エネルギー (原子力) を利用して発電するもので、人間が人工的に作り出したものです。「放射性の原子もエネルギーが高く、不安定なので、…自然に放射線を出して、安定な他の元素の原子に変身します。…このような放射性原子の変身のことを、放射性原子の壊変、または崩壊と呼んでいます」 (大塚・西谷, 2007, p. 13)。原子が崩壊するときに熱が発生するため、冷却が必要になるのです。「原発」は、完全に設計者のコントロール下におくことができなければ、生物に致命的で有害な放射線を施設外に飛散させることとなります。深刻な環境汚染を引き起こす危険も生じます。恒常的に確実に機能する完全無欠の設備・システムの構築と完璧な統制が不可欠です。「例外」・「想定外」は前提になりません。しかし、人間の行いに完全無欠はあり得ません。したがって、完全に安全な「封じ込め」技術も最終的な対処方法もないままに開発した「原発」の事故は、いかなる場合も人災になります。「原発」事故のニュースを耳にしたとき、私は震撼しました。事故はいつか必ず起こるとは思っていました。しかし、「きのうきょうとは」思いませんでした。

放射性物質・放射線の有害性を科学的に示せ、といわれても素人の私にはわかりません。ですが、原爆被爆者やチェルノブイ

リ事故の多くの事例がその恐ろしさを示しています。放射性物質の放射線を出す力 (放射能) は、「物質の中の放射性原子が、1秒あたりに壊変して放射線を放出する数で表し、その単位には、1ベクレル (Bq) を使います」 (大塚・西谷, 2007, p. 12)。「放射能の強さは永遠に不変ではなく、…時間とともに徐々に弱くなっていきます。例えば現在、放射能の強さが100Bq (ベクレル) のコバルト-60は、5年後には50Bqに低下するので、放出される放射線の数も半減します。さらに5年経つと 25Bqに低下します」 (大塚・西谷, 2007, p. 13)。放射線の強さが、初めの強さの半分に減るまでの時間を半減期と呼ぶのです。放射線の放出は、「ヨウ素 (^{131}I)」は8日で半減しますが、「セシウム (^{137}Cs)」は30年、「ラジウム (^{226}Ra)」は1,600年、「ウラン (^{238}U)」の半減期はなんと45億年だそうです。放射線汚染は、「基準値以下で、直ちに人体に影響はない」とニュースでしきりに解説されていますが、放射性物質・放射線が放出され続けられれば被曝量は蓄積されます。放射能物質はヨウ素の他にも放出され、放射線の人体への有害性は決して小さくはないと思います。

3月26日から調査のため中国の天津に行き、南開大学・天津師範大学を訪ねました。教員のだれからも、「福島原発・放射線は大丈夫なのですか」と開口一番、異口同音に聞かれました。チェルノブイリ原発事故が起きた当時、ソ連に滞在していた研究者は、「最近石棺から出る放射線が増えていくんです。放射線被害は何十年にも及ぶから怖い」と語っていました。放射線は、動物も植物も生物全体、自然環境全てを汚染し、人間も住めなくしてしまいます。「原発事故」は、生命の営みを、そして社会も文化もすべて破壊し尽くします。

おわりに 「『春はいつ来るのだろうか』と雀たちが聞きました。『おお春だ』と、まだ雪のつもっている、方々の丘から、やまびこのような声がひびきわたりました。太陽は、だんだんあたたかくさして来ます。雪はとけました。鳥たちは、そろって、春が来る、春が来る、とさえずりました」 (アンデルセン, 1927)。アンデルセンは、めぐり来る四季の移り変わりを生き生きと描きました。私たちは、自然の中で生かされてきたことを忘れ、その尊さをないがしろにしてきのではないのでしょうか。

海も山も放射性物質で覆い尽くされま
す。町から人が消え、村が廃墟になりま
す。自然なくして人は生きられません。四季の
変化を喜び、自然の恵みを享受できる生活
を取り戻さなければなりません。核兵器と
原発は、強大なエネルギーを持ち、生物を
破壊する放射線を出す点で共通します。事
故が起これば制御不能になる「原発」は、
開発も利用もしてはならないと考えます。

引用文献

アンデルセン 1927 『『年』の話』 『アンデルセ

ン童話集』 鈴木三重吉訳 日本児童文庫 アル
ス（子ども文庫の会 2010 季刊 子どもと本
第123号, pp. 4-13)

大塚徳勝・西谷源展 2007 Q&A 放射線物
理 改訂新版 共立出版株式会社 p. 12

新潟県 2007 新潟県で発生した大規模な地滑り
(<http://www.pref.niigata.lg.jp/sabo/1201194036005.html>)

新潟日報社 2004 特別報道写真 新潟県中越
地震 新潟日報事業社

(図書館長 坂西友秀)

知の世界への眩しさ

田舎の高校を出て大学に通い始めた頃、
学生街の大きな本屋に入った時の新鮮な驚
きを今でも思い出す。人気作家の本が店頭
に並ぶのはどこも同じだが、奥に行くと、
さまざまな専門分野の本が詰め込まれて
いた。それまで見たこともないくらい系統
的に分けられた書棚に並ぶ専門的な本を眺
めると、この一軒の書店が膨大な知の宝庫
に思えてきた。

大学の図書館に行くと、その思いはさら
に深まる。知識の偉容を誇っているかのよ
うな古色蒼然たる場所。文学、哲学、歴史、
法律、経済、社会、数学、工学、医学…。
世界の人間が数千年もの歴史をかけて体験
し、考え、悩んで、発見して書き残した財
産が、図書館に蓄積されている。それはま
るで「知の領域」に入ってこないかと静か
に誘っているようだった。

それからは友達の下宿に行っても、小さ
な部屋の本棚に必ず目がいく。本の多さや
内容、読んだ本についていかに多くを語
れるかに憧れも持った。学生時代の私には、
多数の本や図書館は、まさに学術的であ
った。

社会に出て、私は青年活動や社会教育関
係の仕事に就き、地域で働きながら活動
する多くの若者と出会った。そこで私は、彼
らが本を読んでいるかどうかということだ
けでなく、活動を通して多くの体験や行
動で学び、鍛えられた力量というものがある
ことを知らされた。彼らの言葉には、生活
や活動の中から身につけてきた、借り物の

知識ではない切実感や現実感があった。

研修会などに彼らが持ち寄るレポートに
は、地域で暮らす若者の思いが率直に表さ
れていた。跡取りとして育ち、地元に残っ
て就職したものの、過疎が進む地域で、進
路や将来に入り交じる不安と夢。跡取りと
しての恋愛や結婚、親や祖父母の介護の悩
みや葛藤。生活の重みがにじみ出ているそ
んな文章に向き合うと、彼らの前で、自分
が読んだ本について語ることが、何だか薄
っぺらに感じることにすらあった。人間の知
恵とは、生活の中から紡ぎ出されたもので、
歴史の中で残ってきた本や文章はそんなも
のなのだとしみじみと感じたものだ。私の
知への憧れは、その趣を少し変えた。

ここ十数年、インターネットやメールな
どを使うようになり、私の情報収集と発信
の利便性は劇的に変わった。図書館や書店
で感じた知の世界に、手元の端末から簡単
に入っていけるような感覚。検索機能も豊
富で緻密になり、関心のある情報がまさに
玉石混淆でリスト表示される。その見出し
を見ながら本文を流し読みする。必要だと
思われるファイルをパソコンに取り込む。
操作は数回のクリック、保存は一瞬。これ
で一安心。こうして、私はネットやメール
から多くの情報をパソコンに保存してき
た。

ふり返ってみると、ここから私の読書は
実に頼りないものになっていた。本を読ま
なくても、貯めた情報をいつか読もう、い
つでも読めるとの気持ち。ましてや、もは

や保存しなくてもいつでもネットの世界から最新情報を取り込めるではないかという錯覚にも似た安心感。

しかし、その結果、私はついぞその情報をきちんと読まないままになった。文字として読んでいないそれらの情報は、まるで頭の片隅に記憶が残らず蓄積されていない。当たり前のことだが、憧れをもって読んだ本や文章と、資料として保存したデータとは、自ずと役割と重みが違うことをあらためて感じるのだ。インターネットでの

情報伝達については、読書とはまた次元の異なる可能性の議論が、もちろん必要であろう。

かくして、学生時代から長い時間が経ち、本や文章に対する私の思いは少し形を変えながらも、その憧れは変わらない。本屋や図書館は、多くの先人が残してきた知の財産として、依然として私には眩しい。

(日本青年館公益事業部長・業務部長
佛木 完)



大学の猫たち



前任の大学から埼玉大学へ転任してきたのは、ちょうど8年半前になる。大学キャンパスを歩いていて最初に目にとまったのは、理工学研究科棟前の緑地帯にいた3匹の猫である。3匹とも長毛でメイクーンかノルウェイジアンフォレストのような美しい猫である。後で聞いたところによれば、3匹は母猫と兄と妹の家族とのこと。色はそれぞれ違って、母猫は紫がかった灰色、兄はこげ茶色、妹は明るい茶色（写真1）。



写真1 家族：母親と子猫

それぞれに名前がついていたのを知らないで、私は母猫をMom. Cat, 兄をBoss, 妹をLB (Light Brown or Lady Boss) と呼んで、すっかり仲良くなった。毎晩のように仕事の後で彼らのいるところに寄って、餌をあげていた。一番、人なつこかったのがBoss（写真2）で、ごろんと横になっておなかをなでてもらうのが好

きだった。「だった」という「過去形」で書いているのは母猫もBossも亡くなってしまったから。母猫は知り合ってから2～3年後にふっといなくなってしまった。週末にキャンパス中を探して歩いた

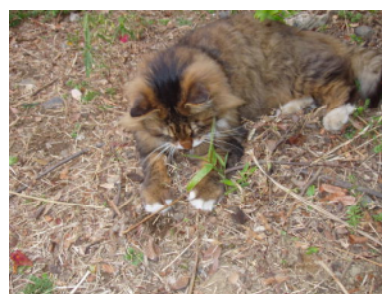


写真2 Boss

が見つからず、野良猫は死ぬときには姿を消すということだから、やはり死んでしまったのだろうと、あきらめざるをえなかった。その3～4年後、Bossは少しやせたなと思っているうちに、腎臓を悪くしていたようで、ついに3年半前に亡くなってしまった。最後の何ヶ月かは元工学部に勤めていた方に引き取られて入院を繰り返す、最期まで親切に看病してもらったが、母猫のように姿を消して一人静かに死にたかったのではないかと、今でも心残りに思っている。

結局、今は妹のLBだけが残って（おそらく10歳くらいと思われるが）、元気に

過ごしている（写真3・4）．毎晩のように仕事の後に餌をあげに行く．冬には寒いので教育学部C棟で餌をあげるが、餌



写真3 LB と筆者（左）・LB（右）

を食べたあと私の膝にのってくる．寒い中、我慢してしばらくの間ベンチに座っていると、用務員さん、学生さんや教育学部の先生方と会うので、コミュニケーションの機会となる．この原稿もそういった時に坂西先生と会って依頼されたので、よいことばかりではない（？）



写真4 LB

ところである夜、猫と一緒に座っていると、一人の学生が私に用があると来て来たので、どうしてここにいるのが分かったのかと驚いた．本人は知らないが、皆さんの間では「小松先生はいつも猫と遊んでいる」という悪い評判がたっているのかもしれない．

大学には何匹か野良猫がいて、教職員や学生さんたちにかわいがってもらっているようである．大学のキャンパスに猫を捨てに来る人もあり、腹立たしい思いもする．ある夕刻、研究室にミャンマーからの留学生S君が訪ねてきて、「先生、猫が捨てられているんですが、どうしましょう。」と言う．「どうしましょう」と言われてもと思つて事情を聞くと、段ボールの箱に入れられて捨てられた猫がい

て、どうも足が悪くて歩けないらしいとのこと．仕方がないので、すぐに近所の動物病院に連れて行った．レントゲンをとって、骨折はしていないが打撲か何かで歩けなくなっているのだろうとのことだった．私は歩けなくては生きていけないだろうから、安楽死させてもらってはと言ったが、敬虔な仏教徒であるS君は断固として反対した．何とかして自分が面倒を見るといふので、痛み止めの注射をしてもらって連れて帰った．ちなみに治療費は18,000円で、その時私の財布の中には10,000円しか入ってなくて困ってしまった．たぶん名刺か何かを渡して、残金は翌日まで待ってもらおうよう頼んだのだろうと思う．翌日、大急ぎでお礼の菓子箱を持って、残りを支払いに行ったの



写真5 Lucky

を覚えている．

この猫は、S君がこっそり自分の実験室で面倒を見ていたが、そのうち歩けるようになり、最後には少し後ろ足を引きずりながらも走ることもできるようになった．S君は、私に命を救ってもらって運のいい猫だとLuckyと名付けたが、命を救ったのはS君に他ならない．この猫については他にもいろいろおもしろいエピソードがあるが、今回は省略する．

S君が修士課程を修了して帰国するときに実験室から放してやった後、何ヶ月かLuckyは建物のそばの緑地付近に暮らしていて、毎晩、私が餌をあげに行くとき足にすり寄ってきていたが、ある日からふっと姿を消してしまった．国際交流会館付近で見たという話も聞いて行ってみたが、再会することはできなかった（写真5）．

2011年3月11日に起こった東日本大震

災で多くの方々が亡くなり、また多くの被災者の方々が未だに不自由な生活をされていることには、本当にお気の毒で言葉を失う思いである。同時に犬や猫などのペットも数多く犠牲になったであろうし、生き残っても飼い主を失ったり、飼い主とはぐれたり、避難所には連れて行けないと置き去りにされてしまった犬や

猫も多いと思うと辛い気持ちになる。嬉しいことに、ペット保護のボランティア活動が始まっているという話も聞くが、何もできない自分としては当面、K先生に教えていただいた団体にペット用義援金を送ろうと思っているところである。

(埼玉大学理工学研究科教授 小松登志子)



けやきの窓



私の推薦図書

このグローバルな世の中で、世界を相手に活動していくうえで、英語で意見交換ができ、論文（または報告書など）を英語で書けることは言うまでもなく非常に重要なことです。英語の中でも特に我々日本人にとって冠詞aやtheはなかなか適切に使用することが難しく、「前置詞3年冠詞8年」と言われるぐらいです。私の大学院時代の恩師で文化功労者の故沼正作教授（京都大学医学部）も、私の学位論文を見てくださった際に、冠詞が一番難しいとおっしゃっておられました。その当時は私もまだまだ駆け出しで、沼先生のそのお言葉もよく理解していませんでしたが、その後研究者として論文等を英語で書くにつけ冠詞の適切な使用に頭を悩ませて来ました。

私はこれまで英語以外にも、ドイツ語、ラテン語、フランス語、スペイン語などいくつかの言語を大学在籍中、また米国留学中に少し勉強してきました。英語と他の西洋言語を比べた時、英語以外の西洋言語は名詞に男性、女性などの性があり、性によって使用する冠詞が代わりません。また、英語以外の西洋言語は冠詞が格変化をし、日本語の助詞のような働き

をしています。そういう意味で、名詞に性がなく、冠詞が格変化しない英語は他の西洋言語に比べて易しい言語と言え、世界共通言語としての特性を持っていると思います。それにもかかわらず英語の冠詞は難しい。

冠詞の用法を理解するうえで、私が日ごろ参考にしている本に、『英語の冠詞がわかる本 英語の冠詞の用法の「なぜ？」を考える』（正保富三著、研究社・東京、1996年初版、2004年6刷）があります。この本は、新書版サイズで205ページと量的にも多くなく、簡潔にまとまっている優れた本で、みなさんに推薦したいと思います。私は英語論文などを書く際に冠詞で困った時は、この本を何度も読み返して、名詞の1つ1つについて、冠詞が必要かどうか、どの冠詞を用いるべきか考えて書いています。みなさんも英語の冠詞をもっと理解したいと思われる方は一度この本を読んでみてはいかがでしょうか。きっと助けになってくれると思います。

(脳科学融合研究センター長/
教授 中井淳一)

埼玉大学図書館の活動

(平成22年4月～平成23年3月)

2010年度 図書館会議委員

埼玉大学総合情報基盤機構図書館会議委員名簿

平成22年12月1日現在

所属・職名	氏名	内線番号	備考
図書館長	坂西 友秀	3655 5000 (館長室)	国立大学法人埼玉大学総合情報基盤機構図書館会議細則 (第2条1項1号委員)
教養学部副学部長	山本 充	3473	(第2条1項2号委員)
教育学部副学部長	齊藤 享治	3744	(第2条1項2号委員)
経済学部副学部長	柳澤 哲哉	4040	(第2条1項2号委員)
理学部副学部長	坂井 貴文	4308	(第2条1項2号委員)
工学部副学部長	重原 孝臣	4760	(第2条1項2号委員)
教養学部教授	山中 信彦	3450	(第2条1項3号委員)
教育学部教授	薄井 俊二	3704	(第2条1項3号委員)
経済学部教授	高橋 純一	4075	(第2条1項3号委員)
理工学研究科教授(理学部)	円谷 陽一	4316	(第2条1項3号委員)
理工学研究科教授(工学部)	久野 義徳	4550	(第2条1項3号委員)
全学教育・学生支援機構 副機構長	安富 博	3251	(第2条1項4号委員)
国際交流センター助教	金井 勇人	4939	(第2条1項4号委員)
研究協力部長	谷本 滋	5001	(第2条1項4号委員)
図書情報課長	高橋 輝	5002	(第2条1項4号委員)

2010年度 図書館活動

◎学外会議関係

国立大学図書館会議

- 22. 6. 18 第57回国立大学図書館協会総会（札幌パークホテル）
- 22. 6. 19 第2回国立大学図書館協会館長フォーラム及び第6回国立大学図書館協会マネジメント・セミナー参加（札幌パークホテル）

関東甲信越地区国立大学図書館協会

- 22. 4. 27 平成22年度関東甲信越地区国立大学図書館協会総会（信州大学）
- 22. 12. 3 第43回関東甲信越地区国立大学図書館協会事務（部・課）長会議（総合研究大学院大学）

埼玉県大学・短期大学図書館協議会

- 22. 5. 17 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（跡見学園女子大学）
- 22. 5. 27 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）第23回総会（跡見学園女子大学）
- 22. 7. 14 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（城西大学）
- 22. 10. 15 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（文教大学）
- 22. 11. 8 第22回埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）研修会出席（獨協大学）
- 23. 1. 25 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（駿河台大学）
- 23. 3. 22 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（淑徳大学）

埼玉県図書館協会

- 22. 5. 26 平成22年度埼玉県図書館協会理事会（埼玉会館）
- 22. 6. 3 図書館協力担当者会（全体会・埼玉県図書館協会）（さいたま文学館）
- 22. 6. 9 平成22年度埼玉県図書館協会総会（埼玉会館）
- 22. 12. 10 図書館協力担当者会（全体会・埼玉県図書館協会）（彩の国すこやかプラザ）
- 23. 3. 11 平成22年度埼玉県図書館協会常任理事会（埼玉会館）

図書館と県民のつどい埼玉

- 22. 4. 20 図書館と県民のつどい埼玉2010企画委員会（埼玉県立浦和図書館）
- 22. 5. 21 図書館と県民のつどい埼玉2010企画委員会（さいたま市立南浦和図書館）
- 22. 5. 27 図書館と県民のつどい埼玉2010実行委員会（跡見学園女子大学）
- 22. 6. 8 図書館と県民のつどい埼玉2010実行委員会（さいたま市立南浦和図書館）
- 22. 6. 29 図書館と県民のつどい埼玉2010公共図書館・埼玉県産業労働部・大学図書館合同実行委員会（さいたま市立南浦和図書館）
- 22. 7. 30 図書館と県民のつどい埼玉2010公共図書館・大学図書館合同実行委員会（さいたま市立中央図書館）
- 22. 8. 27 図書館と県民のつどい埼玉2010公共図書館・大学図書館合同実行委員会（さいたま市立南浦和図書館）
- 22. 9. 15 図書館と県民のつどい埼玉2010大学図書館実行委員会（さいたま市文化センター）
- 22. 10. 2 図書館と県民のつどい埼玉2010（さいたま市文化センター）
- 23. 1. 21 「図書館と県民のつどい埼玉」企画委員会（埼玉県立浦和図書館）

◎学内会議関係

図書館会議

- 22. 6. 28 総合情報基盤機構図書館会議（平成22年度第1回）
 - 22. 11. 29 総合情報基盤機構図書館会議（平成22年度第2回）
 - 23. 2. 9 総合情報基盤機構図書館会議（平成22年度第3回）
-

館員連絡会

- 22. 5. 11 図書館員連絡会（平成22年度第1回）
 - 22. 8. 19 図書館員連絡会（平成22年度第2回）
 - 22. 9. 2 図書館員連絡会（平成22年度第3回）
 - 22. 9. 16 図書館員連絡会（平成22年度第4回）
 - 22. 10. 7 図書館員連絡会（平成22年度第5回）
 - 22. 10. 28 図書館員連絡会（平成22年度第6回）
 - 22. 11. 18 図書館員連絡会（平成22年度第7回）
 - 22. 12. 7 図書館員連絡会（平成22年度第8回）
 - 23. 1. 6 図書館員連絡会（平成22年度第9回）
 - 23. 1. 21 図書館員連絡会（平成22年度第10回）
 - 23. 2. 4 図書館員連絡会（平成22年度第11回）
 - 23. 2. 17 図書館員連絡会（平成22年度第12回）
 - 23. 3. 3 図書館員連絡会（平成22年度第13回）
 - 23. 3. 18 図書館員連絡会（平成22年度第14回）
-

機構連絡会

- 22. 6. 14 総合情報基盤機構連絡会（平成22年度第1回）
 - 22. 7. 5 総合情報基盤機構連絡会（平成22年度第2回）
 - 22. 8. 2 総合情報基盤機構連絡会（平成22年度第3回）
 - 22. 9. 6 総合情報基盤機構連絡会（平成22年度第4回）
 - 22. 10. 4 総合情報基盤機構連絡会（平成22年度第5回）
 - 22. 11. 8 総合情報基盤機構連絡会（平成22年度第6回）
 - 23. 1. 31 総合情報基盤機構連絡会（平成22年度第7回）
-

◎その他

研修・シンポジウム等関係

- 22. 6. 7 I L Lシステム講習会出席（国立情報学研究所）
 - 22. 7. 6 図書館業務運営等事例研修（日本大学）
 - 22. 7. 14～16 目録システム講習会図書コース出席（国立情報学研究所）
 - 22. 8. 25～27 学術ポータル担当者研修出席（国立情報学研究所）
 - 22. 10. 27～29 平成22年度図書館等職員著作権実務講習会出席（文部科学省）
 - 22. 11. 5 第21回保存フォーラム（図書館における資料防災）参加（国立国会図書館）
 - 22. 11. 9～12 第30回西洋社会科学古典資料講習会出席（一橋大学）
 - 22. 11. 24～26 第12回図書館総合展/学術情報オープンサミット参加（パシフィコ横浜）
-

22. 12. 3	平成22年度国立大学図書館協会シンポジウム『大学図書館職員の「強み」と「弱み」』参加（お茶の水女子大学）
22. 12. 10	シンポジウム「大学からの研究成果オープンアクセス化方針を考える」参加 （東京大学）
22. 12. 15	平成22年度関東甲信越地区国立大学図書館職員研修出席（筑波大学）
23. 1. 18	シンポジウム「学術情報流通の改革を目指して」参加（東京大学）
23. 1. 26	平成22年度東京地区国立大学図書館職員研修出席（東京大学）

図書館事業等

22. 4. 12～16	新入生向け図書館オリエンテーション実施
23. 7. 9	図書館利用者へのアンケート調査実施
22. 11. 25	SciFinder（Web版）講習会実施
23. 1. 14	図書館利用者へのアンケート調査実施

既刊 「武蔵野」一覧

埼玉大学図書館報「武蔵野」は、図書館の動向や皆様のご意見などを紹介する小冊子です。「むさしの」の後継誌として、2009年6月から刊行しています。

1号（2009.6刊）

- ・「武蔵野」創刊（図書館長：坂西友秀）
- ・図書館ニュースの発刊によせて（総合情報基盤機構長：川橋正昭）
- ・旧制浦高記念展示室の完成を願って（旧制浦高同窓会常務理事：上田治三郎）
- ・館員通信（利用サービス係長：小野寺伸）

2号（2009.8刊）

- ・SUCRAについて（専門員：村田輝）
SUCRA（機関リポジトリ）で利用の多い文献トップ30

3号（2009.10刊）

- ・大学図書館に望むこと（埼玉県立白岡高等学校・教諭：若海由美）
- ・こんな図書サービスがあればいいな～（文化科学研究科博士課程：李芝善）
- ・けやきの窓（理工学研究科長：水谷忠良）
- ・館員通信（元利用サービス係：白

本清香)

4号（2010.2刊）

- ・歴史史料デジタル化の現状：過去の記録は誰のものか（教育学部准教授：鈴木道也）
- ・けやきの窓：私の推薦図書（経済学部長：伊藤修）
- ・「図書館と県民のつどい埼玉 2009」：「デカンショ」と「フェアブル」（利用サービス係長：小野寺伸）
- ・「埼玉県大学・短期大学図書館協議会」研修会報告（SALA 広報担当：湊伸子）
- ・ホームページがリニューアルされます！（工学部4年 渡邊雄）

5号（2010.4刊）

- ・＜フレッシュマン特集号＞
- ・図書館紹介（図書館長：坂西友秀）
- ・図書館オリエンテーション
- ・図書館発見
「留学生・留学希望者にうれしいニュース」
「グループ学習室新設」
「官立浦和高等學校記念資料室」

-
- ・「デカンショ」によせて（埼玉大学教養学部准教授・哲学：高橋克也）
 - ・子どもと図書・文化
「埼玉大学図書館の児童サービスについて（埼玉県立久喜図書館：山元明美）」
「そよかぜを知っていますか（そよかぜ保育室：橋本慶子）」
 - ・けやきの窓（教養学部長／教授：高木英至）

6号（2010. 7刊）

- ・〈埼玉大学エコ特集〉
- ・AGRICULTURE（図書館長：坂西友秀）
- ・埼玉大学から発信！有機農業でつながる輪（経済科学研究科博士前期過程：堀合知子）
- ・有機農業に興味を持たれた方へ（経済科学研究科博士前期過程：堀合知子）
- ・有機農業に出会って（経済科学研究科1年：山本仁）
- ・お薦めの本（経済科学研究科1年：山本仁）
- ・埼玉大学有機農業研究会の展望（経済科学研究科：有坂昌平）
- ・本の紹介（経済科学研究科：有坂昌平）
- ・日本大学文理学部図書館研修（図書資料係：早川雅代）
- ・けやきの窓（教育学部長／教授：山口和孝）
- ・全国国立大学図書館協会総会報告（図書館長：坂西友秀）

7号（2010. 11刊）

- ・（特集 教育・研究と書籍）
- ・はじめに（図書館長 坂西友秀）
- ・過疎という問題に何処よりも早く直面した早川南小学校について（山梨県早川南小学校校長 村松秀樹）
- ・絵本を用いた活動が自閉症児に与える効果について（教育学部教育心理カウンセリング専修4年 成瀬西）
- ・「アナログ本」の存在感（森野うさぎ）
- ・私たちは電子書籍と電子教科書にどう向き合うべきか（教育学研究科学学校臨床心理専修 孕石敏貴）
- ・けやきの窓（英語教育開発センター長／教授 外山昇）
- ・埼玉大学の教育・研究と埼玉大学生協同組合（埼玉大学生協同組合理事長／経済学部 岡部恒治）
- ・既刊「武蔵野」一覧

8号（2011. 4刊）

- ・（図書館の1年）
- ・東日本大震災からの復興を願うー「原発事故」が突きつけたものー（図書館長 坂西友秀）
- ・知の世界への眩しさ（日本青年館公益事業部長・業務部長 佛木 完）
- ・大学の猫たち（理工学研究科教授 小松登志子）
- ・私の推薦図書（脳科学融合研究センター長／教授 中井淳一）
- ・埼玉大学図書館の活動
- ・既刊「武蔵野」一覧

※ 既刊図書館ニュース「武蔵野」は、埼玉大学図書館ホームページ・「図書館出版物」でご覧ください。

※ 本号第8号は、2010年度の最終号として企画しました。3月11日に起きました東日本大震災の被害は、あまりに甚大でした。その影響と混乱は大きく、「武蔵野」の発行が遅れましたこと、お詫び申し上げます。